

## 私にとっての高津高校ハンドボール部

高校 23 期 (1971 年卒) 片岡 純夫

### 1. 出会い

私が、同期の知人(佐藤 稔君)に誘われて高津高校ハンドボール部に入部したのは、入学した1968年4月の下旬であったと記憶している。中学時代には、さぼりながらも少しだけハンドボールを経験していたので、あまり深く考えずにグラウンドに行くと、そこにいた7~8人で練習が始まった。練習しているうちにわかったのは、3年生、2年生がいないくて、2~3人のOBと一緒に練習されていることだった。

厳しい練習内容であったものの、何とか続けていこうとは思ったが、なぜ3年生と2年生がいないのかを考えて、何となく不安であった。

5月の連休にあった試合には、3年生二人が来てくださり、私たち1年生5人~6人と一緒になって何とか試合には出場できた。

未だにはっきりとした理由は判らないが、その時に3年生(21期 故・水谷 臣良氏)から聞いたのは、厳しい練習に耐え切れずに2年生が集団で退部を申し出て、当時指導にいられていたOBの方々と諍い(いさかい)が起こったこと、その後練習もままならず新入生(私たち23期)が入るまで活動できなかったことなどだった。

### 2. 仲間と時代背景

私たちの同期も、高津中学出身者を中

心に20名以上の入部者があったが、1年生からの在籍は、佐藤稔君、近藤春洋君、上田隆司君(GK)と私の4人だけであり、2年生の後半になって他のクラブから途中入部してきた、柳村誠二君(陸上部)、河合雅彦君(軟式テニス部)の二人を加えて、最終的には6人が同期になる。

2年生になって、10人以上の1年生(24期)が入部してくれたが、残ったのは、今川春夫君、後田昌輝君の二人だけだった。もう1期下(25期)には、中川盛雄君、中川義博君の二人がいた。大人数が残らなかったのは、やはり、先輩方の厳しい指導に耐え切れなかったことが最大の原因であったと思う。

当時は、「70年安保」を前にして、全国の大学を中心にして学園紛争が巻き起こり、その波は高校にも押し寄せていた。高津にも従来の自治会ではなく、全学闘争委員会なるものも組織され、1969年秋から70年にかけて、バリケードで校舎が封鎖される事態も起こった。

そのような雰囲気の中でも、クラブの活動は続いていたものの、退部者を恐れて練習日数を減らし、自主練習するからとOBに申し入れしたりしてギクシャクした関係であったと記憶している。

記憶に残っている試合は、1970年に2年生として新人戦に出場し、出場校数が少なかったのだろうか、二つほど勝って、茨木高校となんばの府立体育館で

の試合に臨んだ時のことである。当時は体育館での屋内試合はこの機会しかなく、勝てば府のベスト8と記憶していた。(実は勝てばベスト16で、勝ち上がりは八尾高校と当たる予想で、直前の練習試合で同校に勝っていたためにそう思い込んでいた。)

その試合でタイムアップ寸前まで同点であったのに、1点負けていると思い込んでいた私が、エリア近くで相手から奪ったボールを、あわててパスした相手が敵の選手で、すぐにゴールされると同時に終了の笛が鳴り、負けてしまったことである。こうして書くと大した話ではないのだが、実はこれには後日談があり、そのパスした相手と進学した関学の体育の授業で一緒になり、素人ではない投げ方をするやつがいるので、よく見るとどこかで見た顔が、……。そこで恥ずかしながら話しかけると、「ひょっとして茨木高校出身か?」、「おうそうや。確か君は高津やな。」と相手も思い出し、このパスミスのお話をすると相手もよく覚えていて、互いに苦笑いということがあった。縁とは不思議なものだと感じたものだ。

### 3. 印象の強い諸先輩

3年間の在学中に指導を受け、お世話になった先輩は数知れない。特に印象が強かった方々を上げてみる。(漏れた方々にはごめんなさい)

主に実際の指導を受けたのが、当時は大学現役の佐藤健二さん(17期)、川上貴司さん(19期)のお二人であった。さらに週末や夏の合宿ともなると、額田

さん(5期)、津田さん(7期)、中江さん(10期)、林さん(13期)、佐藤一さん、橋本さん(以上16期)、久岡さん、東中さん(以上18期)、玉井さん(19期)、早島さん、大地さん、井崎さん、清水さん(以上20期)などが参加してくださり、現役の人数の2倍以上のOBが集まって、とてもにぎやかであったのを思い出すと共に、あの猛暑の中でよく練習に耐えられたなあという思いが強く残っている。

3年生の時だったと思うが、大阪府のクラブ大会があり、当事の「高津クラブ」で、寝屋川高校OBの「寝屋川クラブ」と戦うことになった。というのも、当時は今ほど選手登録が厳格ではなかったのだろう、当時の日本代表で2年後のミュンヘン五輪代表のエースになる木野実さんや、ほかの社会人の有力選手が寝屋川クラブに登録されていたようで、中江さんの声がけで「ここが一番本気でやって、これに一泡ふかそう」ということだったようだ。

そこで、高津も、中江さんや津田さんを指導役として、林さん、佐藤一さん、佐藤健二さん、久岡さん、川上さん、森田さん(19期)、玉井さん、稲葉さん、早島さんなどに、現役からは佐藤稔君も加わり、4日間ほど練習して府立体育館での試合に臨み、大接戦ながら敗れた記憶も残っている。

この時に、当事はおそらく海外に勤務されていたのであろう、「浅野(和郎)さん(12期)がおったらなあ」という声を何度も聞いた。一度か二度ふらっと週末に来てくださり、赤いパンツで走っ

ておられたのを覚えている。

「本当に文武両道のすごい先輩たちばかりやなあ」というのが、強烈な記憶である。

#### 4. コーチとして

1971年に卒業したものの、受験に失敗して予備校通いをする事になった。当時のヘッドコーチであった川上さんも仕事の都合で大阪を離れられることとなり、誰が現役の指導をするかということになった。私自身はそのような技量も無いので、とても無理だとは思っていたが、一方でハンドボールとは関わっていたいという思いは強いものがあった。

というのも、私は高校2年の7月に急性肝炎で倒れて、2ヶ月間自宅療養を余儀なくされ、医者からは強度な運動は命取りになるので辞めるように言われており、2年の夏合宿には参加できなかった。その後は、100%の強度で練習には参加できなかったものの、メンバー不足もあって、それでもクラブに残るように仲間と言われて、最後まで続けさせてもらった。また進学した関学では、とてもハンドボールを続けていく体力も自信もなかった。しかし、何かしらの消化不良があったのだろう。

そのまま、通学も自宅からできたために、予備校時代から数えて5年間は、週に3～4日は高津のグラウンドに通ったものだ。当時は男子への指導が中心で、女子へは片手間というのが本音であった。

一方で大学生としては、学生生活にあまり大きな思い出が無い。クラブ活動もサークル活動も何もしなかったことで、

少し消化不良であったのが正直なところである。何に対しても意欲がわかない中で、高津にハンドボールの指導に行くことを最優先事項にして、自分の怠惰の逃げ道にしていたように思う。家庭教師以外のアルバイトをするわけでもなく、今から考えるともう少し学生生活をエンジョイすることも大事だったなあと思っている。

今から考えると、指導とはいうものの恐ろしいようなことをしていたものだ。自分には体罰を与えていたつもりは全く無いが、現代から見れば『体罰』に近いものであった。後輩に手を挙げて殴ったり、蹴ったりしたことは一度も無いと言いきれるが、罰として遠くに投げたボールをとりに行かせたり、2～3メートルの距離から強く投げたボールを捕球させたりした。

また、練習中には無かったが、試合中には実際に起こってしまった。後に残るような大きなケガをさせたりしたことは思い出したら怖くなる。どのような資格であんなことをしていたのか、免責されることがあったのか、……。当事のクラブ顧問であった、今中啓旦先生、山岡正昭先生にもたいへんな心配をかけていたことも、指導を離れてから気づいた次第である。

多くのすばらしい後輩にもめぐり合った。名を挙げればキリは無いが、現在OB会の副会長として世話をしてくれている、中野元博君や塚正泰之君（ともに26期）は、その代表であろう。このように、彼らが高津のハンドボールに関わり続けてくれていることだけで、自分が彼

らに何か残せたのだと思えて、そのことに満足できる。

また全くの私事だが、自分の長女が豊中高校→関学と進学し、どういうわけかハンドボールを始めて、7年間ゴールキーパーとしてプレーし続け、大学4回生時には関学の主将として、関西学生2部リーグに留まり続けたのもとてもうれしいことであった。

#### 5. これからに期待して

相変わらずハンドボールというスポーツが大好きである。国際的に見ても低迷が続いている日本代表の様子を見るにつけ、マイナースポーツの悲哀を感じている。このスポーツの面白さは実際にプレーした者にしか判らないと負け惜しみを言いながら、ケーブルテレビの中継が無いかをチェックしている。私たちの現役当時とは、すべてのプレーが違う。それでもオフenseが体をぶつけながら、ディフェンスをこじ開けていく様は、やはり見ているだけで血が騒ぐ。自分自身は、メガネをかけずにプレーできなくなっからは、どうしても思い切ったプレーができないでいるし、2年前に狭心症の手術をして以来、全力で走ることも怖くなっている。それでもどこかで、もう一度グラウンドに立ってプレーしている自分

がいる。

最近の指導体制としては、長く高津に在籍していたOBの太田寛人君(30期)が転出してしまったのは残念だが、引き続きクラブ活動は継続している。若いOB(現役大学生)には、顧問の先生や現役諸君とよくコミュニケーションをとり、練習を手伝って助言できるようなコーチングスタッフを続けて出していける支援体制を組み続けるようお願いしたい。現役に強くなって欲しいのは当然だが、昔のように厳しい練習が部員の数を減らすような状態になっては意味が無い。系統立たない指導には限界があり、かえってマイナスにもなることは経験してみればじめてわかることである。

私自身は、高津高校ハンドボール部OB・OG会は、「物心両面の支援はするが、現役への具体的指導には直接口は出さない」組織でありたいと思う。その中で若手のOB・OG諸君の支援で現役が強くなってくれたら、これに勝るものは無い。

今後とも、高津高校ハンドボール部が、男女とも健やかに発展継続してくれることが、何よりの希望である。そのためには、自分自身もできることをやっていくつもりであるし、OB・OG会も地味ながらもコツコツと活動継続できるよう、皆さんのお力添えをお願いしたい。